

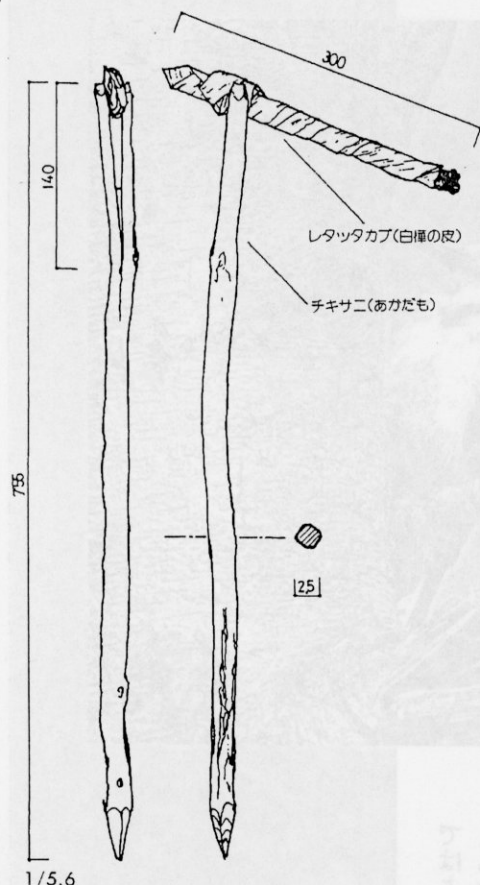


九月上旬、紅葉山49号遺跡で大きな発見がありました。その発見とは、『灯りの木』の出土です。

『灯りの木』とは変な名前ですが、縄文時代初の出土でまだ正式な名前が決まっておられません。

実は『灯りの木』とは、かつてアイヌ民族が使用していた生活用具の一つで、アイヌ語では『スネニ』といい、日本語にすると『あかり・木』となるわけです。

この道具は、左図のように割れ目を入れた細い杭状の木製品で、割れ目に白樺などの樹皮を筒状にしたものを挟んで火をつけ、夜間の灯火に使うものです。



▲スネニの図 萱野茂著『アイヌの民具』より

これまで縄文時代の照明具については、まったく知られておらず焚き火が唯一のものと考えられてきましたが、今回、スネニとそっくりな木製品が、舟形容器やサケの捕獲遺構が発見された場所のすぐ近くから見つかりました。

出土当初、長さ三十三センチメートル、太さ三センチメートルで非常に短い杭だな、というのが第一印象でした。通常、杭など木製品が出土すると位置を測量して、次に出土状態の実測・記載、記録写真の撮影を行ってはいじめて現場から取りあげとなります。

恥ずかしいことに、私は一連の記録が済んで上げる寸前まで、何の変哲も

ない杭と気にもとめていませんでした。言い訳をすると、遺跡では昨年からの通算すると杭は四百点近く出ていますので、少し注意力散漫になっていたのでしょう。

手にとってみると、半ばまで割れ目があり、何よりもその内側が使用によつて焦げていて、明らかにこの部分に何かをはさみ燃やしており、スネニと同じものとわかりました。縄文時代中期末(四千年前)に、すでにこのような道具が生み出されていたとは、驚きです。

また、出土した場所やアイヌの人々の使用例からみて、紅葉山49号遺跡では、この照明が夜間のサケ漁に使われていたものと推定され、当時のサケ漁が夜間も行われていたものと考えられます。

(石橋孝夫)



縄文時代の あか 灯りの木



歴史のドアを開けよう

Natural History 第27回

いしかり博物館誌

■文化財・博物館開設準備室 ☎0133-72-6123
e-mail: bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

▲縄文時代初の照明具